

かさまのれきし

第67回

笠間藩の参勤交代

参勤交代とは、江戸幕府が武家諸法度に規定した制度です。藩主が江戸と領地を一年交代で行き来し、正室と嫡子は常に江戸住いというものでした。

笠間藩の参勤交代は、通常六月に参府（江戸に行くこと）、翌年六月に暇が出て笠間へ帰り、江戸と笠間を行き来しました。江戸に出る経路は府中・水戸街道經由の東道中と小山・日光街道經由の西道中がありました。両道中とも原則二泊三日でしたが、西道中の方が一キロメートル長いので、三泊の時もありました。西道中は笠間藩領の岩瀬・真壁を通り、結城と杉戸（埼玉県杉戸町）に宿泊しました。

双体道祖神



牧野氏笠間藩三代藩主貞喜は、寛政九年（一七九七）五月二十八日早朝に笠間を出発、宍戸宿の大和田家で最初の休憩をとり、次いで岩間宿の本陣小沼家で休み、昼食は府中（石岡市）本陣の矢口家で、中村宿（土浦市）の本陣川村家に宿泊しました。翌二十九日は小金に宿泊、六月朔日正午頃日比谷の上屋敷に到着しました。供侍一〇六人、藩主以下一三〇人の行列でした。前藩主貞長の時期は、二五〇人を超えていましたが、財政難により一〇〇人ほど少なくなりました。貞喜の時期、参府は丑卯巳未酉亥の年でした。

笠間藩牧野家の上屋敷は日比谷御門内、中屋敷は浜町、下屋敷は小なぎ沢・深川大和町にありました。

寛政期以降は、東道中の使用が多くなりま

した。笠間城下を出て、大和田町・裸町（花香町）・下市毛村から手越村を通り、八反山を越えて宍戸に至る街道は、江戸時代の風情を残し、府中街道とか江戸道と呼ばれました。手越地区の街道筋には馬頭尊・如意輪観音像・十九夜供養塔・鬼子母神像などの石仏・石塔が多く見られます。

手越では嘉永元年（一八四八）に宇津惣右衛門が陶器製造を始め、現在の三宅陶園・大津晃窯・三禄陶園がその伝統を受け継いでいます。また、陶の里では、八・九人の陶芸家が作陶に励んでいます。ガラス工房などもあり、芸術村の趣があります。

くねくねした手越街道を進むと、東性寺（真言宗豊山派）や鬼渡神社を左右に見ながら八反山の山道に差し掛かります。その入口に双体道祖神が立っています。駒形の石に女神が銚子を手に、男神が杯を持って二人寄り添った微笑ましい像です。道祖神は、村や家に疫病や悪霊が入ってくるのを封じる神で、サエノ神とかドウロク神とも呼ばれて信仰されてきました。旅の安全無事も祈願しました。

昨秋、この街道の近くに「道の駅かさま」が開業し、大変な賑わいを見せています。静かな手越・八反山道とは対照的です。八反山の山路は薬研状で江戸時代のままです。コロナ退散を道祖神に祈り、小鳥のさえずりを聴きながら山林浴を試みましょう。

（市史研究員 南 秀利）